

地域における高齢者のソーシャル・サポート提供の意味

What does Social Support Provision to Friends Mean for the Elderly?

柳澤 理子¹⁾ 馬場 雄司¹⁾ 草川 好子¹⁾ 河合富美子¹⁾
小林 文子¹⁾ 伊藤千代子¹⁾ 大平 光子²⁾ 山幡 信子³⁾

【要約】本研究では地域で積極的にサポートを提供している高齢者自身の語りを通して、1) サポート提供行動、2) サポート観、3) サポート提供に伴う情緒面への影響を明らかにすることを目的とした。

老人会に属する65歳以上の高齢者で、近隣・友人を良くお世話していると認知されている13人に対し、半構成的面接調査を実施した。面接内容は逐語録に書き起こし内容分析を行った。高齢者のサポート提供行動は、『情緒的共有』『人間関係の調整』『組織成員としての規範的労力提供』『技能・知識の提供』『虚弱者へのアプローチ』の5項目に分類された。サポート観には、『生き甲斐』『見返り』『社会的道義・良心』『性格』『友情』『信条・信仰』『過去への応答』『組織成員としての責任』『地域の互惠性』『サポート受領への抵抗』の10項目があった。またサポート提供は高齢者に、『充実感』『負担感』『サポート受領者への愛着』という3つの情緒を喚起していた。

【キーワード】高齢者, ソーシャル・サポート, サポート提供

I. 緒 言

ソーシャル・サポート（以後、サポートと略す）が、高齢者の well-being に関連することはよく知られている¹⁻⁵⁾。これまでサポート受領の肯定的、否定的効果に関しては多くの研究がなされてきたが⁶⁻¹⁸⁾、そもそもサポートとは複数の人々の間で交換される双方向的なものであり¹⁹⁾、高齢者はサポートの受領者であると同時に提供者でもある。

高齢者のサポート提供に関しては、サポートを多く提供する者は、また多くのサポートを受けており^{20, 21)}、授受のバランスが取れていることが高いQOLに結びつく¹³⁾、あるいはこのバランスが崩れた時に心理的ストレスが高まるとする報告²²⁾と、サポートのバランスではなく、むしろ受領が少なく提供が多い場合に、主観的幸福感やモラールが高まるとする報告がある^{16, 23-25)}。この相違には、何をサポート提供として測定するかが影響している。「心配事を聞いてあげる」「励ましたり慰めたりしてあげる」などの情緒的サポートや、「体の具合が悪い時に世話する」「仕事を手伝う」などの短期間の手段的サポート提供を測定した研究では、高齢者の心

理に肯定的影響を報告するものが多い。これに対し、機能障害や痴呆高齢者の介護に代表される、継続的で過大なサポート提供や義務的なサポート提供は、提供者に身体的・精神的負担感、主観的幸福感の低下、日常生活への支障をもたらす²⁶⁻²⁸⁾。また参加者に情緒的にのめりこむことによるサポート提供の否定的側面²⁹⁾も指摘されている。このように高齢者が提供するサポートは、サポートの性質や提供する相手によってその情緒面への影響が異なると考えられる。

高齢社会の進行に伴い、専門家によるサポート提供だけでなく、高齢者同士の支え合いが重要視されるようになってきた。家族内のサポート交換はもちろん、地域においても高齢者はインフォーマル・サポート・ネットワークの一翼を担っている。Liebler & Sandefur³⁰⁾のアメリカにおける研究では、男女共に約10%の者が、家族外と積極的にサポートを交換する high exchanger であった。High exchanger である高齢者、すなわちサポートを受領するだけでなく、近隣や友人へのサポート提供を積極的に行っている高齢者は、地域における高齢者同士の支え合いの中心にいる。このような高齢者は、サポート提供にどのような

Satoko YANAGISAWA, Yuji BABA, Yoshiko KUSAGAWA, Fumiko KAWAI
Fumiko KOBAYASHI, Chiyoko ITO, Mitsuko OHIRA, Nobuko YAMAHATA

1)：三重県立看護大学

2)：大阪府立看護大学

3)：前 三重県立看護大学

意味をみいだしているのであろうか。

サポート提供の意味については、過大な負担を担う家族サポートに関する研究があるが³¹⁻³³⁾、地域で主体的にサポートを提供している比較的健康な高齢者に関する研究は少ない。今後ますます増加する高齢者が、互いに支え合う地域づくりを進めるためには、積極的サポート提供者がサポート提供にどのような意味を見出しているのかを理解することが大切である。

そこで本研究ではサポートを、友人・近隣に対して提供される物理的および心理的支援と捉え、地域で積極的にサポートを提供している高齢者自身の語りを通して、1) 高齢者は他の高齢者に対し、どのようなサポートを提供しているのか(サポート提供行動)、2) サポート提供にどのような意味を見出しているのか(サポート観)、3) サポート提供に伴う情緒面への影響にはどのようなものがあるのか、を明らかにすることを目的とした。

II 研究方法

本研究の参加者は、3つの老人会に属する65歳以上の在宅高齢者で、痴呆がなく、日常生活が自立している者の中から選出した。北米での研究ではあるが、近隣・友人へのサポート提供は、家族と同居しているか否かで異なる³⁴⁾とする報告があるため、参加者は家族と同居している(食事を共にしている)者に限った。参加者は各老人会会長に依頼し、最も積極的に友人や近隣の人々の世話を焼いたり、面倒をみたりしている高齢者を推薦してもらった。

老人会長から推薦されかつ調査への参加に同意した高齢者は、男性5人、女性8人、計13人であった。参加者の概要を表1に示した。年齢67-84歳、同居人数は平均3.8人であった。4人は夫婦二人暮らし、3人は二世帯同居、6人は三世帯同居であった。ほとんどの者が現地域に51年以上暮らしており、残る二人も結婚により現在の地域に移って来た者であった。過去の最長職は、公務員や教員であった者4人、会社や工場に勤務していた者2人、農業3人、自営業1人、パートタイム1人、主婦2人であった。学歴は、小学校卒1人、中学校卒9人、高校卒2人、大学卒1人であった。主観的健康感は、良好6人、普通6人、病気がち1人であり、ADLは日常生活がすべて自立12人、少し手伝っ

てもらう1人であった。

面接は研究者2名が、作成したインタビュー・ガイドに従い、参加者の自宅、もしくは参加者が指定した公共施設において実施した。1回のインタビューに要した時間は、50分~2時間半であった。承諾が得られた参加者については、面接を録音し、逐語録を作成した。録音の許可が得られなかった2人については、インタビュー後できるだけ速やかにその内容を記録した。面接はインタビューガイドに従った半構成的面接であり、サポート提供行動(提供しているサポートの内容)、サポート観(サポート提供の動機・意義)、サポートに伴う情緒(サポート提供時の気持ち)について尋ねた。サポート提供については「お世話」と表現した。手段的サポートだけでなく、情緒的サポートについても語られるように配慮し、自発的に語られない場合は、「人から相談事をよく受けますか。例えばどんな相談事が多いですか」と尋ねた。

分析は、内容分析を採用した。先行研究でサポート提供やその心理的効果には性差があることが知られているため^{17,30)}、男女別に分けて分析した。面接の逐語録から、意味のある最小単位の文章を取り出し、コード化し、共通の意味内容をもつコードを集めてカテゴリーとした。カテゴリーを、文脈における意味を考慮しながら関連づけ、再編、統合することで、抽象度を高めてテーマを発見した。

III 結果

1. サポート提供行動

高齢者が提供しているサポートには、1)情緒的共有、2)人間関係の調整、3)組織成員としての規範的労力提供、4)技能・知識の提供、5)虚弱者へのアプローチがあった。

1) 情緒的共有

『情緒的共有』には、『情緒的支持』と『ちょっとした贈り物』とが含まれた。『情緒的支持』とは、「その人の気持ちになって、話し相手」になったり、「あんたが行ったら行く、あんたが行かんだら行かん」と言う相手と一緒に集会にでかけたりするなど、時間と情緒を共有することにより、相手に対して肯定的態度をもつ者、相手の側に立つ者であることを示し、相手の情緒を支えるサポートである。

表1 対象者の概要

対象者	性別	年齢	現地域での 居住年数	同居形態	同居 人数*1	過去の最長職	ADL*2	主観的 健康感*3
A	男	70代	51年以上	三世代	6	公務員	自立	ふつう
B	男	70代	51年以上	三世代	7	教員	自立	良好
C	男	70代	51年以上	三世代	6	公務員	自立	ふつう
D	男	80代	51年以上	二世帯	5	自営業	少し手伝ってもらう	良好
E	男	80代	51年以上	夫婦	2	会社員	自立	ふつう
F	女	60代	10～50年	三世代	6	農業	自立	ふつう
G	女	70代	51年以上	夫婦	2	主婦	自立	病気がち
H	女	70代	51年以上	二世帯	4	主婦	自立	良好
I	女	70代	51年以上	夫婦	2	工場勤務	自立	良好
J	女	70代	51年以上	夫婦	2	パートタイム	自立	ふつう
K	女	70代	10～50年	三世代	5	公務員	自立	ふつう
L	女	80代	51年以上	二世帯	2	農業 自営業手伝い	自立	良好
M	女	70代	51年以上	三世代	4	農業	自立	良好

*1 対象者を含む。

*2 ADLは、すべて自分でやっている（自立）、少し手伝ってもらう、ほとんど手伝ってもらう、全部手伝ってもらう、の4段階に分類した。

*3 主観的健康感は、良好、ふつう、病気がち、の3段階に分類した。

『ちょっとした贈り物』は、自分が作った手芸品、おかず、洋服、旅行の土産などを提供したり、貰い物のお裾分けをしたりすることである。これはその物資が相手の必要を満たすという意味よりも、友情や親密さの証として提供されると考えられるため、情緒的共有として分類した。

2) 人間関係の調整

『人間関係の調整』は、友人同士の交流の中心になったり、高齢者同士あるいは嫁と姑のいざこざを仲介したりする行動である。

「息子と嫁さんが車で来るの。そうすると息子さんが、またおばあさんがようけこぼしてったやろって言うのな、悪口を。ようけこぼしとったに、そこへ、拾ってきなって私が言うてやんねやな。そうするとおばあさんが来るとまた言うの。おばあさんの方にな、あんたも悪いわ。そんな嫁さんやからな、嫌うこと言わんときな」

3) 組織成員としての規範的労力提供

『組織成員としての規範的労力提供』とは組織の一員として役割を担う行動であり、組織とそこに属する

人々全体に対するサポート提供である。「老人会役員」や地域の「組長」「民生委員」「シルバー人材センター理事」などでリーダーシップをとっている者、メンバーとして「カラオケ係」など定まった役割を担う者があった。

4) 技能・知識の提供

『技能・知識の提供』は、職業や経験を通して若い頃から培ってきた技術や情報を伝達したり、提供したりするサポートである。具体的には、「踊り」「民謡」「手芸」「襖貼り」などをボランティアとして教えたり、近隣の人々の「着付け」をしてあげたり、「冠婚葬祭の段取り」「地域のしきたり」あるいは「福祉サービスの情報」などを提供していた。

5) 虚弱者へのアプローチ

一人暮らし、病弱、痴呆、施設入居者などの虚弱者に対して提供するサポートである。これには『見守り』と『介護提供』とが含まれていた。

『見守り』は、近隣の独居老人や同居していても昼間一人で過ごす高齢者、痴呆をもつ高齢者などを「覗きに（様子を見に）」行ったり、「お変わりありません

表2 対象者別サポートタイプ，サポート観とサポートに伴う情緒

対象者	性別	年齢	サポートタイプ	サポート観	サポートに伴う情緒
A	男	70代	組織	見返り・良心* ¹ ・性格・組織* ² ・互恵性* ³	充実
B	男	70代	組織	生き甲斐・互恵性	充実
C	男	70代	組織=個人	生き甲斐・良心・互恵性・抵抗* ⁴	充実・負担
D	男	80代	個人	組織・抵抗	負担
E	男	80代	組織	生き甲斐・良心・性格・組織・互恵性	充実・負担
F	女	60代	組織=個人	見返り・互恵性	充実
G	女	70代	個人	生き甲斐	充実・負担
H	女	70代	個人	性格・友情	充実・負担
I	女	70代	個人	生き甲斐・見返り・性格・組織・抵抗	充実・負担
J	女	70代	組織	生き甲斐・友情・組織	充実
K	女	70代	組織	生き甲斐・見返り・信条* ⁵ ・組織	充実・負担・愛着* ⁷
L	女	80代	個人	生き甲斐・友情・互恵性	充実
M	女	70代	組織=個人	生き甲斐・見返り・性格・信条・過去* ⁶	充実・負担

*1 社会的道義・良心
 *2 組織成員としての責任
 *3 地域の互恵性
 *4 サポート受領への抵抗

*5 信条・信仰
 *6 過去への応答
 *7 サポート受領者への愛着

か」と声をかけたり、「電気がついてるか」と注意を払い、必要に応じてその高齢者の様子や変化を民生委員など責任ある人に伝達するものである。

「根気よう覗きに行つて、『おるならおるって返事して』って言うてきますのやけど、黙つておると、それで一軒の家は鍵がここにあるで、鍵掛かっておつたら鍵開けて入つて行つてくれんかという家があるんやけど、息子さんとうちの息子と同級生やもんで」

『介護提供』は、虚弱者の日常生活のお世話をすることで、介護におけるインフォーマル・サポートの一翼を担うと考えられるものである。痴呆をもつ高齢者の相手をしたり、「給食サービス」で食事を作ったり、洗濯をしてあげたり、車椅子を押したりする行動である。

「(入院中の友人を見舞つて)今朝洗濯物取りに行つてな。(略)ちょうど着替へ失つた時やで、ああ持つてって洗うて来るわつて」

これらのサポートは男女共にみられたが、どのサポートが多いかには男女差がみられた。男性では『技能・

知識の提供』サポートと『組織成員としての規範的労力提供』サポートについての語りが多かった。女性で最も多かったのは『情緒的共有』であり、次いで『虚弱者へのアプローチ』であった。

近隣・友人に対するサポート提供には、老人会など組織の一員として提供するサポートが多い者と、友人との関係性に基づき、個人として提供するサポートが多い者とがあった。男性5人のうち3人は組織的サポートが多く、1人は個人的サポートが多かった。1人は組織的サポートも個人的サポートもそこそこ行うというタイプであった。また女性8人のうち2人は組織的サポートが多く、4人は個人的サポートが多かった。残りの2人は組織的サポートも個人的サポートも積極的に進んでいた(表2)。

2. サポート観

近隣や友人へのサポート提供を積極的に行っている高齢者は、サポート提供にどのような意味や意義を見出しているのだろうか。サポート観には次の10のカテゴリーが含まれていた。1)生き甲斐、2)見返り、

3) 社会的道義・良心, 4) 性格, 5) 友情, 6) 信条・信仰, 7) 過去への応答, 8) 組織成員としての責任, 9) 地域の互恵性, 10) サポート受領への抵抗.

1) 生き甲斐

サポートが趣味, 特技などと結びついており, サポートを喜びや生き甲斐として捉えていた.

「人の世話は苦にならんのさ. 主人に怒られるんやけど, 私, 生き甲斐やもん, 仕方がない」

「社会奉仕とかなんとかちゅう大義名分で行つとるのと違って, やつとる連中が続いとるのはな, 楽しいんですわ」

2) 見返り

サポート提供には見返りがある, と考えている場合で, 自分の勉強になる, 提供したサポートはやがて返ってくる, などがあつた.

「蒔かぬ種は生えぬって言うてな, 蒔いたら必ず生えるから, そういふのと一緒. 人にあげたらな, 必ずこの間ありがとうねって, ちゃんと色変え形変えして返ってくるから」

3) 社会的道義・良心

相手が困っているから, 人間として助けなければ, など人としての良心に基づくものとしてサポートを捉えたものである.

「仮にでもな, 不幸な目に遭つたらな, (略) 助けに行かなて, そうでっしゃろ. それは人間の良心ですよ」

4) 性格

サポート提供の動機を, 世話好きなど自分の性格に帰している場合である.

「よう家で笑われるんやけど, おじいさんは何でもさせてもらうてたら喜んどののやろ, 言うけれども, (略) そんなもんじゃあない. 人間の一つのさ, 自分はこの中のもって生まれた個性やと思つててもらわんと」

5) 友情

特別なことではなくつきあひの一部として, あるいは友人として自然な気持ちでサポートを提供しているとするサポート観である.

「お世話っていう訳やないんやけれど, 友達なんです. (略) 私ら戦争未亡人やから, 遺族同士で仲良しでいるわけなんです」

6) 信条・信仰

自分の信仰や親の教えなどの信条が, サポート提供の背景となっている場合である.

「父親が生きてはったら喜んでくれるやろうなあと. (略) 世のため人のために尽くす人やなければあかんって, 米喰い虫ではあかんって言って, 父親にしよっちゅう言われました」

7) 過去への応答

人生の中で経験したできごとへの応答として, サポートを捉えている場合である. 戦争で友人は死んだのに自分は「生き残れた」. だから, 生き残った者に与えられた責任として「お役に立てれば」と考えたり, 若い頃家族や社会の束縛によって失われた時間を取り戻そうと考えるサポート観である.

「男の人はもっと気の毒. みんな戦死してるから. まだ私ら女やでな, 生き残れたけども. (略) 予科練とか何とか志願して行くんじゃない. そしてもうどうかすると帰れなくてさね, 若くして散ってるやない. そのこと思つたらまだね. (略) また一つ一つお役に立てればね」

8) 組織成員としての責任

組織成員として役を引き受けたのだから, きちんと果たさなければならぬというサポート観である.

「男として受けて立たんたらん場合は, 受けて立たなしゃあないで. (略) 出てやってくれいいう面があつたら, やらんことにはあかんしな. (略) 誰かがこれな, やらんことには収まらんさな」

9) 地域の互恵性

『地域の互恵性』には, 『地域への報恩』と『地域の相互支援』とが含まれた. 『地域への報恩』とは, 個人として他の人々に世話になったからそれに報いるのだという, 具体的恩恵に対する返礼という意味をもっていた.

「若い時からそうやって地域の人に理解を求められてさ, この年迎えてんのさ. (略) それに報いるだけの, 地域のな, 目に見えたものをしていかんことには」

これに対し『地域の相互支援』は, 具体的恩恵の対象を特定するわけではないが, 地域の習慣として相互に助け合うのが当たり前というサポート観である.

「周囲の人を, 年寄りの人を自分の世話できる人はしてあげて, 慰め合いしたりして, それで自分が動

けないようになったら、また後輩に世話してもらおうじゃないかという、合言葉みたいなことで、自然とそんなことすな」

10) サポート受領への抵抗

サポート提供には積極的であるが、サポート受領に対しては抵抗を示す高齢者もあった。

「立てるうちは自分で頑張らなね。(略)世話してもらうたらあかんね。世話するくらいでなきゃね」

一人の高齢者がサポートに見出している意義は一つではなく、ほとんどの高齢者が複数の意義を語った。半数以上の高齢者が語った項目は『生き甲斐』『組織成員としての責任』であった。男女別にみると、男性では『地域の互惠性』『生き甲斐』『社会的道義・良心』『組織成員としての責任』、女性では『生き甲斐』『見返り』が多かった(表2)。

3. サポート提供に伴う情緒

高齢者のサポート提供は、その情緒にどのような影響を及ぼしているのであろうか。サポート提供に伴う情緒には、『充実感』『負担感』『サポート受領者への愛着』があった。

1) 充実感

『充実感』とは、サポート提供によって満たされた感情をもつことである。高齢者はサポート提供を楽しみ、役に立っているという自己価値を見いだしていた。

「楽しいの。張り合いがいいの。もう自分の趣味しとるよかね、公園のボランティアしてるのが一番楽しいの」

「そこまで世話かけた。悪かったねえって言いなざるけども、(略)良かったなあとと思ってさ。間に合うてよかったなあとと思ってさ」

2) 負担感

高齢者は『充実感』を感じながら、同時に『負担感』も感じていた。負担感を感じる理由を高齢者は、『加齢・体力の限界』『過大なサポート量』『人間関係の気遣い』『世間体』『家族への負担』『仕事の困難』に帰していた。

「もう歳やしなあ。もう若い人がようけおんのやで(自分がやらなくても)」(加齢・体力の限界)

「次から次からあれ(仕事)持ってきますでな。ここは嫌や、ここはええって言えやんでな」(過大なサポート量)

「お互いさんのことで(略)神経ばかり遣うてな」(人間関係の気遣い)

「(公務員だったので)あまりなことしたらあかんという負担がある」(世間体)

「家あけないかんで。夫はからだ手術したから」(家族への負担)

「(家を訪問しても)『今日は何も用事ありませんで結構ですわ、ありがとう』って言うて、パチッと締め出されてさ。(略)ピシッと鍵かけてしとりますやろ。ちょっとやそっとでは返事しやへんし」(仕事の困難)。

3) サポート受領者への愛着

『サポート受領者への愛着』は、サポートを提供している相手に対する心理的距離が非常に近くなることにより、心配したり悲しんだりすることである。サポート受領者が死亡したことを悲しんだり、自分の「知らんどうちに物言わんようになる」ことを心配したりする情緒として表れた。

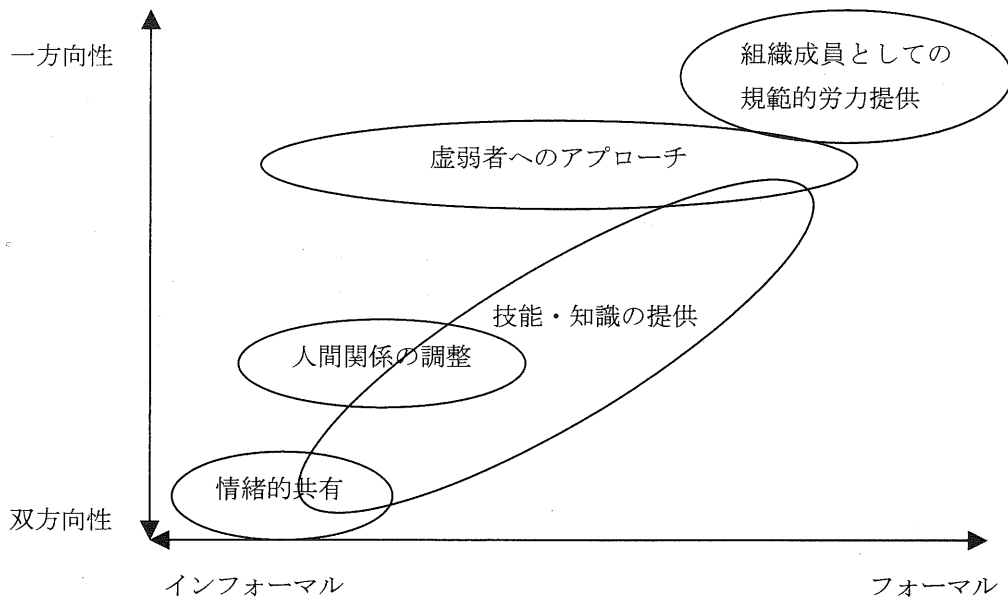
IV 考 察

本研究の対象となった高齢者は、近隣や友人に対して、多様なサポートを提供していた。男性には『技能・知識の提供』および『組織成員としての規範的労力提供』サポートが多く、女性には『情緒的共有』および『虚弱者へのアプローチ』が多く見られ、サポート提供の内容には男女差があった。

このような男女差が生じた背景には、いくつかの理由が考えられる。第一に男女間のソーシャル・ネットワーク形成の差異である。海外の研究では、女性は男性に比べソーシャル・ネットワークの規模も、接触頻度も多く、より多様な人々と様々なタイプの人間関係を結ぶと言われており¹⁷⁾、また男性よりも情緒的サポートの交換が多い³⁰⁾。本邦においても、大都市、過疎地、中都市近郊農村の比較研究で、いずれの地域でも近隣との交流は女性の方が多い、という報告がある³⁵⁾。このようなソーシャル・ネットワーク形成の差異と、若い頃からのサポート交換のパターンが、現在のサポート提供行動に影響しているのではないと思われる。

第二に参加者抽出方法の影響である。本研究では参加者を老人会を通して募集した。老人会の活動の中心は女性で、男性が少ない傾向にあることはよく知られ

図1 高齢者のサポート提供行動の性格



注) 一方向性とは、サポートの「提供」という側面のみが提供者に強く意識される場合、双方向性とはサポートの「提供」と「受領」が併存する、すなわちサポートが「交換」されている場合を示す。

ている。本調査の対象となった3つの老人会でも同様であり、少数の男性は若い頃から役職にあたり、地域で役割を担っていた者が少なくなく³⁶⁾、会社員のように地域との関係が希薄な者は入会しにくいのだと考えられる。3つの老人会の地域背景は異なるが、いずれの老人会においても男性が老人会長を務めており、リーダーシップをとるタイプの男性高齢者が老人会には多いのではないかと考えられる。このことが男女のサポート提供行動の差として現れたかもしれない。また積極的サポート提供者を対象として選定したことが、この傾向をより助長したかもしれない。

男性には、老人会や自主組織の一員として提供するサポートが多く、女性には、近隣や友人との関係性に基つき、個人として提供するサポートが多かった。前者は多くの役をこなし、時に広範囲に活動する活発な「リーダー」タイプであり、後者は人々に頼られ、信頼されて、限られた範囲の人々にサポートを提供する「世話人」タイプである。もちろんこれは性により明確に区分されるものではなく、女性のリーダータイプ、男性の世話人タイプも存在し、またどちらもそこそこに行うという混合タイプもあった。

Krause³⁷⁾は組織的なサポートをフォーマルサポート、個人的なサポートをインフォーマルサポートと定義し

た。リーダータイプはフォーマルな、世話人タイプはインフォーマルなサポートが多いと言える。

このフォーマル、インフォーマルというサポートパターンを一つの軸と考えると、サポートの「提供」という一方向性のみが提供者に強く意識されるか、サポートの「交換」という双方向性が意識されるかというもう一つの軸があり、本研究参加者のサポート提供行動は、その性格によってこの2軸が構成する平面の中に位置づけることができる(図1)。『情緒的共有』は、インフォーマルでサポート交換的な性格をもつ。この対極にあるのが『組織成員としての規範的労力提供』である。『虚弱者へのアプローチ』は全体として提供的な性格が強いが、『見守り』はインフォーマル、『介護提供』はフォーマルな性格が強い。

前述のリーダータイプはこの図の右上に位置するサポート提供行動が強く、世話人タイプは左上もしくは左下に位置するサポート提供行動が多いと解釈することができる。

このようなサポート提供行動は、提供者の情緒に影響を及ぼす。本研究参加者はサポート提供に積極的な者であり、ほとんどの者が充実感を述べているにも関わらず、8人の高齢者は同時に負担感も感じていた。

『加齢・体力の限界』『過大なサポート量』『家族へ

の負担』という理由が示すように、これまで人々に頼られ、近隣や友人へのサポートを積極的に提供していた高齢者が、加齢や健康の衰えを自覚し、もう以前と同じ量のサポートを提供することができなと感じているのではないかとと思われる。サポート提供者自身のみならず、その配偶者も高齢になり、そのために以前よりも家族へのサポート提供が必要とされてきていることも、家族外へのサポート提供を負担に感じる一因となっていると考えられる。

高齢者のサポート提供が高齢者自身の心理に及ぼす影響について、縦断的にその変化を検討した研究は少ない。その影響は、おそらく常に一定なのではなく、同一の高齢者でも加齢とともに変化していくのではないかと予想され、今後の課題である。

本研究参加者がサポート提供に見出した意味は、10項目に分類されたが、さらに大きく2つに分けることができる。一つは自分自身の中にサポート提供の意味を見出しているものであり、『生き甲斐』『見返り』『社会的道義・良心』『性格』『友情』『信条・信仰』がこれにあたる。一方『組織成員としての責任』『地域の互恵性』は、組織や地域社会という自分の外側にある世界との関係の中に、サポート提供の意味を見出しているものである。前者を個人的理由、後者を社会的理由と考えることができる。

本研究参加者が語ったサポートの意味は、高齢者が何をサポート提供の「報酬」だと考えているのかを物語っている。サポート提供は『生き甲斐』だと語った者は、13人中9人であった。参加者は、サポート提供の動機を『性格』として語っていることにみられるように、いわゆる「世話好き」な人々である。自分のサポート提供を相手が喜んでくれる、感謝されるという結果に満足し、まるで趣味でも行うかのように楽しんでサポートを提供している。仕事や社会における責任から退いた後に見出した新しい仕事、居場所、自己価値だといえる。

このように『生き甲斐』『見返り』などの個人的な意味を見出す者に対し、『組織成員としての責任』や『地域の互恵性』といった社会的意味を語る高齢者は、男性に多かった。日本人とアメリカ人のサポート交換について比較した研究^{38, 39)}で、日本人は家族内においては相互責任の原則に基づいた依存関係が、家族外との関係においては、はじめと遠慮が働き、相手と一定の距

離を保とうとすると報告されている。アメリカ人のサポート提供が対称的双方向性を求めているのに対し、日本人のサポート提供は、相手の資源提供への返礼や好意の交換を意味するとしている。

本研究参加者が語ったサポート観のうち、『地域の互恵性』はまさにこのような過去および現在の、あるいは将来期待する資源提供への返礼を意味しているのではないかとと思われる。老人会のような自主グループにおいても『組織成員としての責任』を感じる背景には、『世間体』や『人間関係の気遣い』が存在し、それが負担感につながっていると考えられる。

サポート提供に積極的な本研究参加者が、『サポート受領への抵抗』を示したことは納得できる。すなわち参加者がサポート受領に対する抵抗を語った時、それは前述の日米比較研究³⁹⁾において述べられているように、相手が提供してくれる資源や好意に対し、それに見合った返礼ができない状態を意味する。サポート提供に積極的で、それに生き甲斐を見出している高齢者は、本来自分が得るべき相手からの感謝や喜びを、逆に自分が支払わなければならないことに抵抗を感じるのである。海外の研究では多くのサポートを提供している者は、また多くのサポートを受領している^{20, 21)}とするものが多いが、本研究参加者では、少なくとも主観的にはサポート提供を受領よりも強く意識していると思われる。

『過去への応答』は、高齢者に特徴的な、サポート提供の意味づけである。戦争体験は男性高齢者にとって大きな意味をもつだけでなく、女性高齢者にとっても大きなできごとであり、戦後60年を経た今日でも、自分は生き残った者だという認識がサポート提供の源になっている。

また厳しい姑や夫の下で、自分の意思を表さずに辛抱した過去を取り戻そうとしている高齢者もあった。加齢を自覚し、人生の終わりを意識せずにはいられない高齢者が、これまでの人生の不足分を補おうとしている、いわばやりなおしの青春であり、自分なりに人生を締めくくろうとしている姿勢がサポート提供という形で表れていると考えられる。

地域で積極的にサポートを提供する高齢者は、その長い人生の歩みの中で、地域の文化、社会規範、形成したソーシャル・ネットワーク、ライフイベントなどを通して、サポート提供を行う個人的および社会的理

由を見出し、独自のサポート観を形成する。このサポート観が積極的なサポート提供行動を喚起し、その結果充実感を得て、サポート提供行動が強化される。しかし老人会など所属組織メンバーの高齢化による、期待や責任の増大とそれに伴う過大なサポート量、自分自身の加齢による体力・気力の衰えや不健康の自覚、配偶者が高齢になることによる家族内サポートの増大などにより、サポート提供に対する負担感も生じてくる。これが積極的なサポート提供者の語りを通して、高齢者のサポート提供の様相である（図2）。

V 結 語

本研究は、地域で積極的にサポートを提供している高齢者自身の語りを通して、高齢者のサポート提供行動、サポート観、サポート提供に伴う情緒を明らかにした。

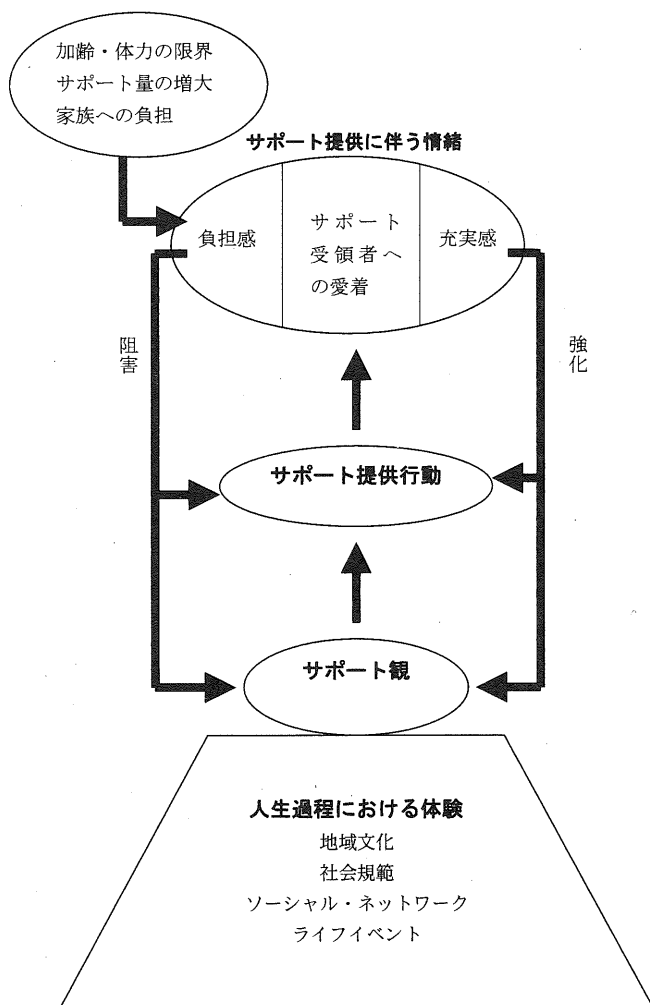
本研究では、老人会を通して参加者を募った。従って老人会に所属しない高齢者、特に男性高齢者のサポート提供には、本結果とは異なる提供行動パターン、異なる意味づけがあるかも知れない。世話好きとして評判であっても、それを特に表に出すようなものではないとして、調査を断る高齢者もあった。従って本研究結果は、自他共に認める「世話好き」な高齢者の結果であり、必ずしも高齢者一般にあてはまるとは限らない。

また本研究が対象とした3つの老人会には、市部、農村地域、漁村地域が含まれ、それぞれの老人会や地域の特性が影響していると思われるが、その分析にはいたっておらず、地域特性と個人特性とが混在した結果だといえる。今後はより小地域に焦点を絞って研究を行うことが必要であろう。

このような限界があるにも関わらず、本研究は高齢者の支え合いの中心となる積極的なサポート提供者が、実際にどのようなサポートを提供し、なぜサポート提供に積極的なのかを明らかにしたものである。リーダータイプ、世話人タイプのそれぞれの特徴を生かし、あるいは高齢者のサポート提供の意味づけに応じたインセンティブを検討することにより、より有効で提供者本人の満足度の高い地域の支え合いのあり方を構築することに役立つであろう。

本研究を実施するにあたり、ご協力いただきました老人会、市町村保健師、社会福祉協議会のみなさまに深く御礼申し上げます。

図2 サポート提供行動、サポート観、サポート提供に伴う情緒の関連



文 献

- 1) Cobb,S.:Social support as a moderator of life stress, *Psychosomatic Medicine*, 38 (5), 300-314, 1976.
- 2) Choi,N.G.,Wodarski J.:The relationship between social support and health status of elderly people:Does social support slow down physical and functional deterioration?, *Social Work Research*, 20 (1) ,52-63, 1996.
- 3) 岸玲子,他:前期高齢者と後期高齢者の健康状態とソーシャルサポート・ネットワークー農村地域における高齢者 (69~80歳) の比較研究ー,日本公衆衛生雑誌,12,1009-1023,1996.
- 4) 坂田周一,他:高齢者における社会支援のストレス・バッファ効果ー肯定的側面と否定的側面ー,社会老年学,31, 80-90,1990.
- 5) 古谷野亘,他:都市中高年の主観的幸福感と社会関係に関連する要因,老年社会科学,16,115-124,1995.
- 6) Bothell,W.L.,et al.:Social support and depression among low income elderly, *Journal of Housing for the Elderly*, 13 (1-2) , 51-63,1999.
- 7) 青木邦男:高齢者の抑うつ状態と関連要因,老年精神医学雑誌,8 (4) ,401-410,1997.
- 8) 村岡義明,他:地域在宅高齢者のうつ状態の身体・心理・社会的背景要因について,老年精神医学雑誌, 7 (4) ,397-407,1996.
- 9) Hays,J.C., et al.: Does social support buffer functional decline in elderly patients with unipolar depression?, *American Journal of Psychiatry*, 158 (11) ,1850-1855 (2001) .
- 10) Lough,M.A.: Health and social support among older women in congregate housing, *Public Health Nursing*,13 (6) ,434-441,1996.
- 11) Whittemore,R.,et al.:The peer advisor experience providing social support. *Qualitative Health Research*,10 (2) ,260-276,2000.
- 12) Thuen F,et al.:The effect of widowhood on psychological wellbeing and social support in the oldest groups of the elderly, *Journal of Mental Health*,6 (3) ,265-274,1997.
- 13) Kim,H.,et al.:Social support exchange and quality of life among the Korean elderly. *Journal of Cross Cultural Gerontology*, 15 (4), 331-347, 2000.
- 14) 杉澤秀博:高齢者における主観的幸福感および受療に対する社会的支援の効果-日常生活動作能力の相違による比較-,日本公衆衛生雑誌,40 (3) , 171-180,1993.
- 15) Rook,K.S.:The negative side of social interaction. Impact on psychological well-being, *Journal of Personality & Social Psychology*, 8 (4), 1097-1108,1984.
- 16) 金恵京,他:高齢者のソーシャル・サポートと生活満足度に関する縦断的研究,日本公衆衛生雑誌,43 (7) , 532-541,1999.
- 17) Antonucci, T.C.:Social Supports and Social Relationships. ed. by Binstock,R.H.,George,L.K., *Handbook of Aging and the Social Sciences*, 205-226, Academic Press, San Diego, 1990.
- 18) Thompson Jr.,E.H.,et al.:Social support and caregiving burden in family caregivers of frail elders, *Journal of Gerontology: Social Sciences*, 48 (5) ,245-254,1993.
- 19) Antonucci,T.C.et al.: Social support and reciprocity: a cross-ethnic and cross-national perspective, *Journal of Social and Personal Relationships*, 7,519-530,1990.
- 20) Chou,K.L.,Chi,I.:Social support exchange among elderly Chinese people and their family members in Hong Kong: a longitudinal study, *International Journal of Aging and Human Development*,53 (4) ,329-346,2001.
- 21) Wu, Z., Pollard,M.S.:Social support among unmarried childless elderly persons, *Journals of Gerontology:Social Sciences*, 53B (6) ,S324-335, 1998.
- 22) Pillay,U.,Rao,K.:The structure and function of social support in relation to help-seeking behavior, *Family Therapy*,29 (3) ,153-167,2002.
- 23) 甲斐一郎,他:高齢者におけるソーシャル・サポート授受と主観的幸福感,日本公衆衛生雑誌,42 (10) ,

特別付録,1035,1996.

- 24) 金恵京,他:韓国農村地域の在宅高齢者におけるソーシャル・サポートの授受と QOL,日本公衆衛生雑誌,43 (1) ,37-48,1996.
- 25) Wallsten,S.M.et al.:Disability and depressive symptoms in the elderly: the effects of instrumental support and its subjective appraisal, Journal of Aging and Human Development,48 (2) , 145-159,1999.
- 26) 亀田典佳,他:バーニアウト・スケールを用いた老年者介護の家族負担度の検討 (第3報) アルツハイマー型老年痴呆における痴呆問題行動・身体障害度と家族負担度の関連,日本老年医学会雑誌,38 (3) , 382-387,1988.
- 27) 杉澤秀博,他:要介護老人の介護者における主観的健康感および生活満足度の変化とその関連要因に関する研究,日本公衆衛生雑誌,39 (1) ,23-32,1992.
- 28) 緒方泰子,他:在宅要介護高齢者を介護する家族の主観的介護負担,日本公衆衛生雑誌,47 (4) ,307-319,2000.
- 29) Coyne,J.C. et al.:The other side of support: Emotional overinvolvement and miscarried helping. ed. by Gottlieb,B.H.,Marshaling Social Support:formats, processes, and effects, 305-330, Sage,1988.
- 30) Liebler,C.A., Sandefur,G.D.:Gender differences in the exchange of social support with friends, neighbors, and co-workers at midlife, Social Science Research, 31,364-391,2002.
- 31) 山本則子:痴呆老人の家族介護に関する研究 娘および嫁介護者の人生における介護経験の意味 研究背景・文献検討・研究方法,看護研究,28 (3) , 178-199,1995.
- 32) 山本則子:痴呆老人の家族介護に関する研究 娘および嫁介護者の人生における介護経験の意味 (2) 価値と困難のパラドックス,看護研究,28 (4) , 313-333,1995.
- 33) 山本則子:痴呆老人の家族介護に関する研究 娘および嫁介護者の人生における介護経験の意味 介護量引き下げの意思決定過程,看護研究,28 (5) , 409-427,1995.
- 34) Wister,A.Living arrangements and informal social support among the elderly, Journal of Housing for the Elderly,6 ,33-34,1990.
- 35) 岸玲子,他:高齢者のソーシャルサポートおよびネットワークの地域差・性差 (道内3地域の比較研究) ,第47回北海道公衆衛生学会,82,1995.
- 36) 柳澤理子,他:QOL 向上を目指した在宅ケアの研究報告書,1-14,三重県立看護大学地域交流研究センタープロジェクト報告書,2000.
- 37) Krause, N.et al.:Providing support to others and well-being in later life, Journal of Gerontology : Psychological Sciences,47 (5) ,300-311,1992.
- 38) Akiyama,H.,et al.:Rules of social support exchange: The U.S. and Japan,Asian, American Psychological Association Journal,12 (1) ,34-37, 1987.
- 39) Arnault,D.S.:Help-seeking and social support in Japanese sojourners, Western Journal of Nursing Research,24 (3) ,295-306,2002.